

2025年1月5日降誕後第2主日

旧約聖書 エレミヤ書 31章7-14節
使徒書 エフェソの信徒への手紙 1章3-14節
福音書 ヨハネによる福音書 1章《1-9》、10-18節

新年あけましておめでとうございます。本日は、2025年最初の主日であり、降誕後第2主日です。教会暦は、すでに昨年から新しくなっていますが、わたしたちの教会では、それを機に祈祷書試用版の新しい聖書日課を用いています。福音書がマタイ福音書（博士たちの訪問後の聖家族のエジプト避難の記事；マタイ2：13-15、19-23）から、ヨハネによる福音書（ヨハネ1：《1-9》、10-18）に変わりました。それまでのマタイ福音書の内容は、明日の顕現日（1月6日）の後の出来事ですから、時間順序が正しくなったといえます。ただし、昨年降誕日、ヨハネ福音書の1章1節から14節を学びましたので、本日は重複する部分もあります。しかし、新しい聖書日課でも、ヨハネ福音書を他の福音書のように（ABC年として）通して学ぶことはありませんので、主日の福音書として、改めてヨハネ福音書からイエス様の誕生について学ぶことも大切です。

ヨハネ福音書は、いろいろな特徴がある福音書ですが、著作の目的は、非常に明確です。それは、20章31節に「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じて、イエスの名によって命を得るためである」とある通りです。また、この目的は、福音書全体に及んでいます。本日の箇所も、福音書の冒頭ですが、この目的が関係します。つまり、書かれていることを理解することではなく、書かれていることを信じるのが大切なのです。とは申しましても、何も理解しないで信じることを求めているわけではありませんから、内容について大まかに触れたいと思います。

本日の聖書日課としては、1節から9節までが《》にはいっています。ここでは、「あった」ものと「なった」ものが対照的に記されています。「あった」ものとは、「言」、「神と共にということ」、「神」、「命」、「光」です。そして「なった」ものとは、「万物」、「肉体」です。そしてこの「あった」ものは、人間とは直接関わりなく時間と空間を超えて、全ての存在という事柄の基礎としてあるものであり、「なった」ものは、歴史の中で生成したもの、主なる神様によって、人間の歴史と関わりながら作られたものです。わたしたちは、「なった」ものに属するのですが、終始そのまま終わること、それが主なる神様の意図ではありません。「なった」ものであり続けることが、わたしたしの本来の姿ではないのです。

昨年も降臨節にルカ福音書を通して、イエス様がわたしたちと同じように、人間として生まれたことを学びました。イエス様が誕生から死に至るまで、わたしたち人間と同じである、そのことを確認する意味での、誕生の記述がある意義は大きいのです。しかし、降誕日に、ヨハネ福音書は、むしろ逆で

あること、すなわちイエス様の人間としての誕生を描かないことを通して、わたしたち人間が本来イエス様と同じであったことを示していると学びました。そのことは、本日の箇所にも示されているのです。

本日の箇所に「しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には、神の子となる権能を与えた。この人々は、血によらず、肉の欲によらず、人の欲にもよらず、神によって生まれたのである。」(ヨハネ 1:12-13)とあります。わたしたちは、本来は、「なった」ものでありながら、イエス様と同じように、主なる神様とともに「ある」ものでした。そのあり方は、創世記の言葉を借りるならば、「自分(神)のかたち」(創 1:27)を備えたものです。今(といってもいつの時代もですが)、わたしたちは、その「かたち」を失っているのですが、イエス様を信じることを通して、神の子となる「権能」を再び得るのです。ただし、ここにある「神の子」は、イエス様の「神の子」(ヨハネ 1章では 1:34、49 など)と、「子」の言葉が異なります。日本語訳では同じように訳されていますが、イエス様の「子」は、概して言えば、法律上の「子」で「子」として親のすべてを受け継いでいます。この箇所の「子」は、血統上の子、「子孫」の意味で、いわば「家族」です。また、「神の子となる権能」の「権能」という言葉は、「力」が基本的意味です。しかし、いろいろに訳されます。同じ箇所が、新共同訳では「資格」、口語訳では「力」(そのままですね)、文語では「権(權)」となっていました。

これらから 12 節と 13 節が示すこととは、イエス様を信じることを通して、わたしたちはイエス様と全く同じ存在になるわけではありませんが、「神の家族」として、その本来のあるべき「神のかたち」を取り戻すようになる、その「力、資格、権能」を得るといことです。だからこそ、イエス様を信じるもの同士から、まことの平和が生まれるのです。家族であるからこそ、争うのではなく、共に歩むことが大切であるからです。

現実の世界では、家族であっても、またきょうだい同士であっても争いがあります。また同族だけが排他的に仲が良いことも問題はあるでしょう。その現実をそのまま示すかのように教会も、なぜたくさん分派に分かれて争いあうのかと良く問われます。またなぜ自分たちだけに救いがあると排他的に教えを語るのかとも問われます。まさにこれらは教会が、今まで抱えて来た課題であり、これから解決すべき課題といえるでしょう。

本日は、2025年(この概念自体人間がつくったものですが)の最初の主日です。その最初に主日に、わたしたちは、どんな違いがあっても、イエス様を信じることを通して、主なる神様の家族となることをヨハネ福音書から示されました。その基本的な事柄を、改めて信じたいと思います。また、そのことが自分たちだけの特権ではなく、誰にでも可能となる主なる神様の恵みであることを、わたしたちの歩みから示したいと思います。その信仰と歩みから、まことの平和が生まれます。今年も世界中で争いが起こり、この世界にまことの平和など訪れないかもしれません。しかし、それが訪れるために、教会に集められ、主の家族として歩みたいと思います。